

# 病害虫について

## 「いもち病」

6月下旬以降好適感染日となり、前年より発生は少なかつたものの、7月中旬から発生が確認されました。

## 「カメムシ類」

すくい取り調査では、前年より発生量が多く、多発生が予報されたため畦畔の草刈りや防除を呼び掛けた結果、斑点米による落等は少なく収まりました。

# 次年度に向けた

## 取り組み

## 「気象対策」

本年は気象の影響が大きく経過しました。気象変動に対応する土づくりは、作柄だけでなく、品質低下の軽減に繋がります。また、土壌の改善は、排水対策・稲わらのすき込み・土壌診断による資材の施用を総合的に実施することが効果的です。

## 「カメムシ対策」

本年は畦畔の草刈り・防除の徹底により被害は比較的少なかつたですが、次年度も継続して行いましょう。水田内の雑草（ホタルイ類、カヤツリグサ、ノビエの穂に産卵）が多いとカメムシ類の発生も高い傾向から、除草剤の選択及び散布時期、水管理と本田防除では出穂期以降2回防除の徹底を。また、休耕田などの圃場がカメムシ類発生の原因とみられるケースが増えているので、最低限の圃場管理を実施してください。

## 「適期作業と

## 栽培密度の適正」

田植え作業は極端に早かつたり遅かつたりすると、その後の天候によって大きく品質などに影響します。作業計画を立て、それに合わせて健苗を育成し、適期の田植えを行います。（県中央地区では5月20日～25日頃）また近年、栽植密度は「疎植栽培」の傾向にあります。疎植栽培は茎数の確保に影響がある上、作柄や品質、食味に影響をおよぼすことがあります。坪当たり60～70株を基本としましょう。



### 営農 今月のワンポイント 稲作

## 浸種～播種まで

秋田地区営農センター主任

佐藤 怜太



### ●浸種の目的

種子の発芽を揃えるために、発芽に必要な水分を吸収させるとともに種子に含まれる発芽阻害物質を溶出させ取り除くことにあります。（無消毒種子を使用の場合は、塩水選、種子消毒を行ってください）

種子消毒	ヘルシード乳剤	ばか苗病・こま葉枯病・いもち病	200倍・24時間種子浸種
	スターナ水和剤	苗立枯病・もみ枯細菌病	200倍・24時間種子浸種
	テクリンCフロアブル	ばか苗病・こま葉枯病・いもち病・苗立枯病・もみ枯細菌病	200倍・24時間種子浸種
苗箱消毒	イチバン	多くの菌に効果（特にリゾプス類）	500倍～1,000倍 瞬時浸漬または散布

### ●浸種の開始

田植日から逆算して決めます。極端に早い浸種は水温が低くなりやすいので、吸水ムラや催芽時の揃いが悪くなります。また、種子消毒薬剤の効きも悪くなるので注意しましょう。

### ●種子管理手順

手順	項目	管理方法	
1	保管	湿気や水分の影響を受けない状態を保つ	
2	浸種	水量	種子1kgに対し水量3.5リットル
		水温	10～15℃を目安とする
		水の交換	浸種開始後2日間は交換しない。その後2～3日毎に交換する
5	催芽	湯通しをして均一な催芽に努める	

催芽は品種によって出芽にかかる時間が異なるので、他の品種との同時処理は行わないようにしましょう。



### ●播種

中苗で箱あたり乾籾100g（浸種籾で約125g）で育苗期間は30～35日とします。厚播きは後半の徒長を招くほか、ムレ苗の要因となりますので適正な播種量で行いましょう。

#### 【中苗による育苗目安】

播種量	125g/箱（浸種籾）
育苗期間	35日
葉数	3.2～3.5葉
草丈	13～15cm

### 密苗移植栽培について

近年、新技術として密苗移植栽培を行う生産者が増えています。初めて行う場合には通常の育苗とは播種量や時期、育苗期間が異なりますので、密苗栽培の作業体系をよく確認の上で行いましょう。

